

草津温泉再興の記録 2010—2017

発行者　草津町
企画・編集　北山創造研究所

草津温泉再興の記録 2010—2017



草津温泉がいかにして風情と情緒を取り戻し、賑わいを呼び戻そうとしたのか。その7年間のまちづくりの軌跡。

平成二九年度
都市景観大賞受賞





#草津町 #草津温泉 #昔の草津は良かったなぁ #湯畑 #岡本太郎 #そして時は湯のように流れ #風情と情緒 #世界の草津へ #草津めぐり #湯源湯路街 #御座乃湯 #湯路広場 #熱乃湯 #湯もみ #温泉落語 #草津の夜 #湯畑の灯路 #西の河原公園 #まちは楽しいか？ #草津よいとこ一度はおいで♨

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

草津温泉
再興の記録
2010—2017

発行者　草津町
企画・編集　北山創造研究所

草津温泉再興の記録　2010—2017





©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

草津温泉
再興の記録
2010—2017

発行者　草津町
企画・編集　北山創造研究所

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

一人の人から
一本の路地から
一軒の湯屋から
まちは変わる



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

はじめに

この本は、平成二二年（２０１０年）から始まった「草津　湯源湯路街構想」の過程と成果をまとめた記録です。

第一期が平成二七年（２０１５年）に、続く第二期が平成二九年（２０１７年）に完成を迎えたことで、草津温泉が再び脚光を浴びつつあるように感じています。

今こそ、構想時に想い描いた草津町の未来を、住民の皆様へ、そして草津温泉にお越しになる方々へ改めてお伝えし、後世に残していかなければならないと思い、この本を制作いたしました。

七年間に渡る草津温泉再興への物語をどうぞお愉しみください。

草津町長

黒岩信忠

目次

はじめに 5

第一章　昔の草津はよかったなぁ 10
―明治時代 12
―大正時代 14
―昭和時代 16

時は湯のように流れ 20
―平成二十年　草津は変り果てていた

第二章　草津を変える男たち 30
―平成二二年　黒岩信忠町長就任

集う男たち　チョイナチョイナ 50
プロジェクトチーム発足

考える男たち 52
―平成二二年～二七年　基本構想書「草津めぐり」

第三章　湯源湯路街、現る 64
【湯源湯路街第一期】
―平成二五年「御座之湯」開業 67
―平成二六年「湯路広場」完成 77
―平成二七年「熱乃湯」再建 89

夜の草津はさみしいなぁ 101
【湯源湯路街第二期】
―平成二八年「湯畑」完成 106
―平成二九年「西の河原」完成 112

〈プロジェクトチーム座談会〉まちは楽しいか？ 120

草津よいとこ一度はおいで 133

編集を終えて 142

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

第一章
昔の草津はよかったなぁ



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

明治時代

江戸時代に庶民の旅が大流行したことをきっかけに、草津温泉は「草津千軒江戸構え」と謳われ、諸国温泉効能鑑で当時の最高位である東大関に格付けされるほどの温泉街となりました。その人気は明治時代に入っても衰えることなく、町は全国からの湯治客で賑わいました。



明治廿二年四月廿三日印刷同年四月廿五日出版著作兼印刷及発行者神田区鈴木六番地阿部善吉

草津温泉古版画集 草津温泉郷土研究会編

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

大正時代

明治時代後期から大正時代にかけ、電話や電気、自動車の普及、草軽電鉄の開通など、草津温泉にも近代化の波が押し寄せます。一方で湯畑のまわりには、とんとん葺きの屋根や上州地方独特のせがい出し梁造りの軒先など、特徴ある木造建築が立ち並び、趣ある姿を見せています。



光泉寺から望む大正時代の湯畑

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

昭和時代

戦後、草津温泉では新しいまちづくりが強力に推し進められます。昭和二三年には日本初の邦人用スキーリフトが天狗山に架設、昭和二四年には草津町を中心に上信越高原一帯が国立公園に指定されます。その後、交通網の整備とレジャーブームの波に乗り、草津は従来の療養型温泉地から大型観光地へと様相が一変していきました。



昭和初期に湯畑で行われた草津温泉感謝祭

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

岡本太郎から続く
湯畑づくり

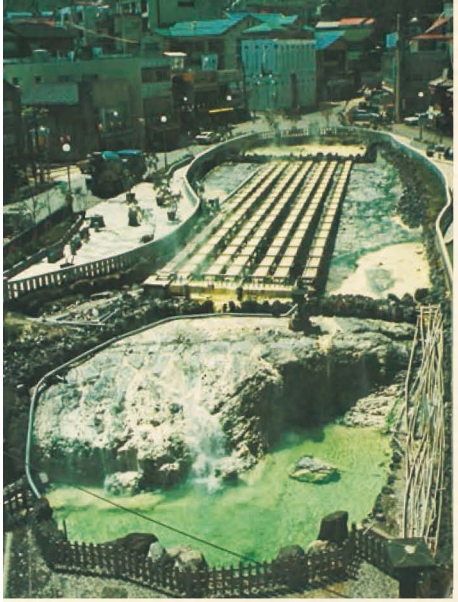
草津温泉の中心に位置する町のシンボル、湯畑。いつも変わらず湯けむりに包まれている湯畑も、歴史の中では刻々とその姿を変えてきました。

ここでは草津町が温泉街としての魅力向上を目指し、多くの創作者とともにつくり上げてきた湯畑と湯畑広場の歴史を紐解きます。



湯畑に湧きだした源泉は、幾本もの長い木桶を通り、温度を下げた後に各宿に送られています。

©２０１８草津町役場、Created by（株）北山創造研究所



1975

岡本太郎
「歩道といこいの場」

岡本太郎が温泉とスキーを目的に草津温泉に訪れた際、町より湯畑周辺の都市計画を依頼されました。岡本太郎は四角形だった湯畑をひょうたん型にし、湯畑を一周する石柱と遊歩道をつくり、湯畑の新しい楽しみ方を生み出しました。近年、岡本太郎が制作した草津温泉のシンボルマークが発見され、湯畑広場に新しく記念碑がつくられました。



1993

象設計集団
「白旗の湯」

湯畑のすぐ脇に湧く源泉は、建久4年（1193年）に源頼朝が発見し入浴したものと伝えられています。この年、入湯から800年となるのを記念して、白旗源泉からお湯を引く唯一の共同湯が誕生しました。純粋な源泉掛け流しのお湯を入場無料・年中無休で楽しめることで常に人気の共同湯となりました。



1995

象設計集団
「草津町個性形成湯畑周辺整備計画」

リゾート開発により街なみの方向性を見失いはじめた草津町は、地域の伝統と文化によって、湯畑を中心とした落ち着きのある温泉街をつくりだそうと、湯畑周辺の整備を計画しました。これにより、瓦を埋め込んだ特徴的な遊歩道と足を休めることのできる東屋やベンチがつくられました。

「足湯」

同計画では、かつて湯畑のまわりに存在した、足だけを入浴させる共同湯を再現し、足湯もつくられました。草津の温泉は高温で強酸性のため、手足を数分浸すだけで温浴効果が期待できます。湯畑から引いた温泉を気軽に楽しめるため人気を集めています。

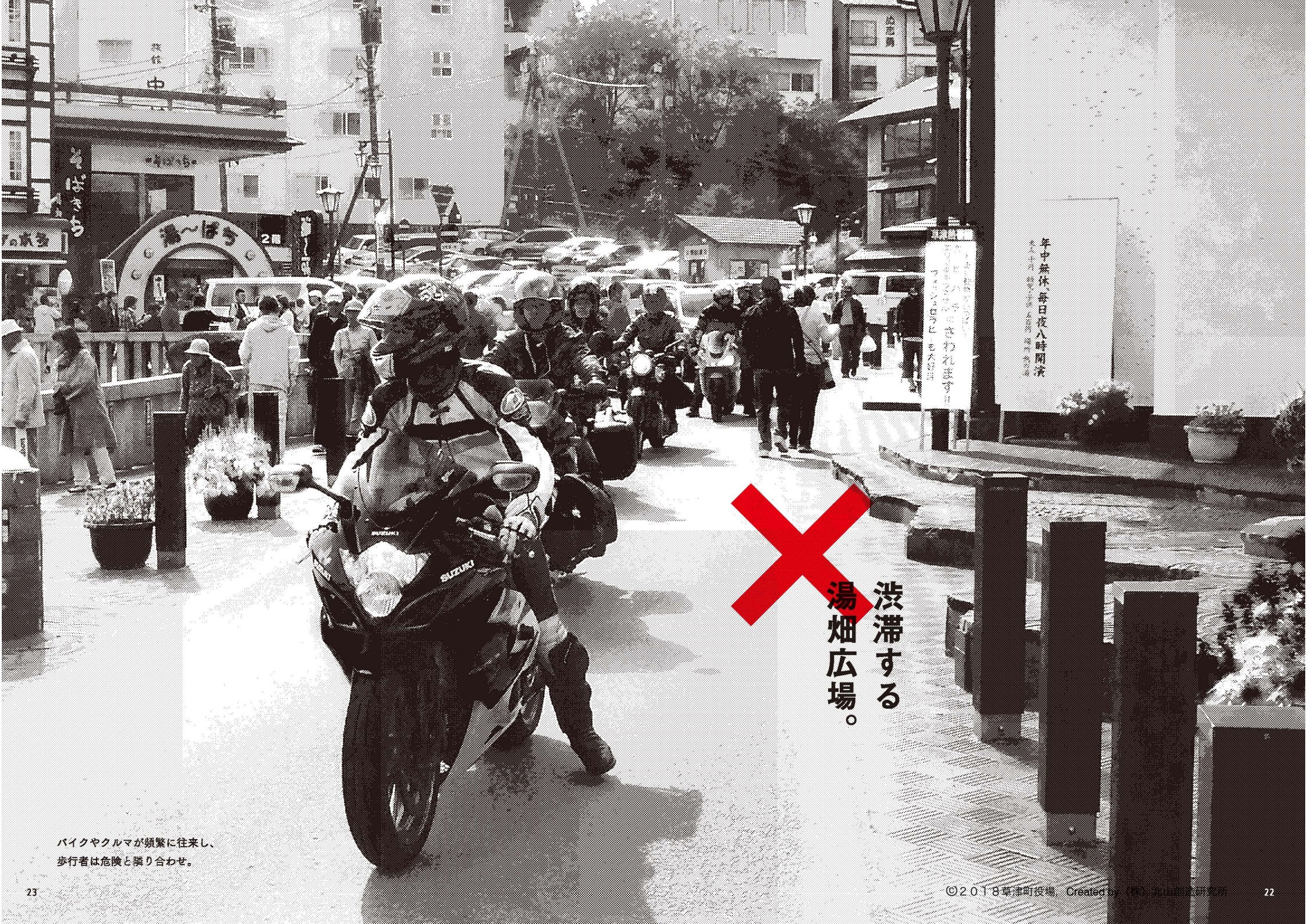


そして月日は
湯のように流れ



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

時は平成二〇年、
草津は変り果てていた。



渋滞する湯畑広場。

バイクやクルマが頻繁に往来し、
歩行者は危険と隣り合わせ。

©２０１８草津町役場、Created by（株）北山創造研究所



まちの中心に陣取る駐車場。

利便性の高さから常に
満車となる湯畑広場に
面した駐車場。

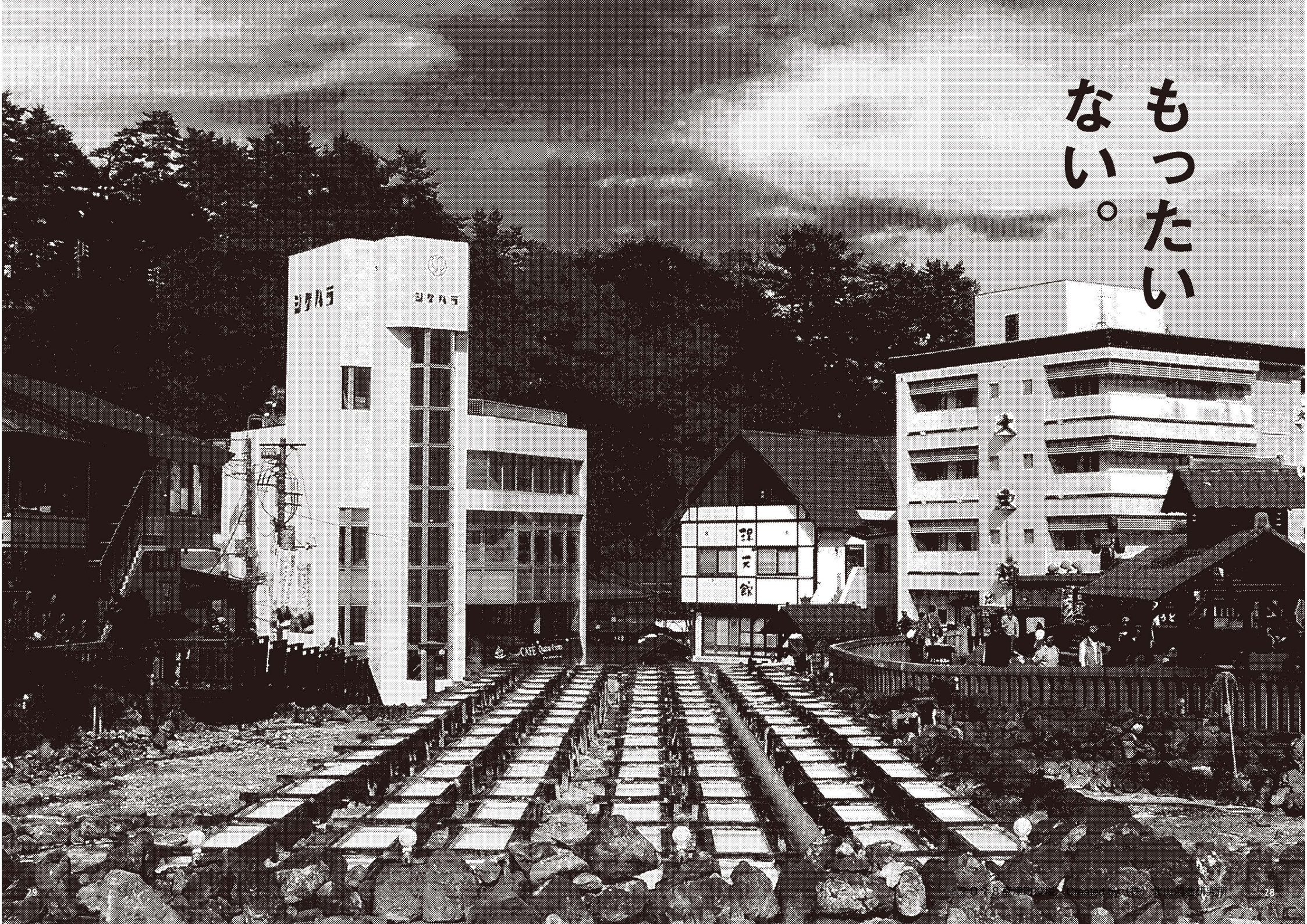
©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

湯畑広場へ通じる坂道から
目に入るものは、趣のない
ものばかり。



バイク、クルマ、電柱、電線、看板。×

©２０１８草津町役場、Created by（株）北山創造研究所



© 2018 Kyoto Prefecture Created by 京都府観光連盟

そんな残念な
草津を見て、
一人の男が
立ち上がった。

アドッコイショ



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

第二章
草津を変える男たち

政治生命をかけたまちづくりです。

愛されて草津。



黒岩信忠

草津町長

1947年群馬県草津町生まれ。1983年草津町議会議員、2007年草津町議会議長を経て、2010年1月草津町長に就任。現在2期目。

駐車場から新名所へ

ー平成二二年一月、黒岩信忠氏が新しい町長に就任したところからプロジェクトは始まります。

「町長としてマニフェストに掲げたのは、『お客様に愛される草津町の実現』です。お客様に愛される草津とは、町民の皆さまにも愛される草津です。町民のアイデアを活かし、町全体を楽しめる温泉街にしていきたいと考えていました」

ーそして黒岩氏は、「湯畑広場再整備計画」を打ち出しました。

「この計画は、長期間に渡り駐車場として利用してきた二カ所の旅館跡地を新たな名所に作り変えようというものです。駐車場は見た目が悪いだけでなく、交通渋滞を引き起こす要因にもなっていました。しかし、使いやすい立地で利用者も多いため、駐車場を移

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



設したら、湯畑に訪れる人が減ってしまうと、反対の声もありました。来草者（草津への観光客）にとっては利便性よりも、安全性や景観の美しさの方が喜んでもらえるという自信があった私は、『銀座のど真ん中に駐車場が必要でしょうか？』と説得して回りました。この計画は、これからの草津のまちづくりに向けた私の決意であり、政治生命を賭けるという強いメッセージでもありました」

ー実現に向けて黒岩氏は、草津町で行われた講演会で出会った北山孝雄氏のもとへ足を運ぶことになります。

「私は、草津温泉の再興のために歴史をなぞらえたまちづくりをしたいと構想していました。百年前の草津の魅力を蘇らせながら、百年後の草津にも通じるまちづくりにするにはどうすればよいのかと考え、同じ視点を持っていた北山さんに会いに行ったわけです」

初めて訪れた草津は、風情と情緒の失われた温泉街でした。



北山孝雄

北山創造研究所 代表

どんな生活を実現したいかを発想の原点に、人を軸にしたまちづくり、くらしづくりを手掛ける。代表的なプロジェクトに亀戸サンストリート、21_21 design sight基本構想、日本橋 福徳神社構想、両国駅広小路など。

草津との出会い

ー平成二〇年七月に草津町に支店を持つ東和銀行から、まちづくりに関する講演の依頼を受けたことが、北山氏と草津町との出会いとなりました。このときの講演テーマは「このまちにくらしたい草津」でした。

「講演会では、今までの我々の仕事をご紹介しながら、住民を主役としたまちづくりによって、まちに対する誇りを育て、そのまちにしかない魅力が生み出されてきたという話をいたしました。どんなプロジェクトであっても、広い視点で考えることが大切です。また草津町の場合は、町民の皆さんが草津へ訪れるお客様の目線でまちづくりをしていくことも重要です。大正時代の写真の街なみに残る風情と情緒が失われてしまっていることは、草津温泉にとって大きな損失です。渋滞する湯畑広場や鉄筋コンクリート造の巨大な観光ホテル、景観を邪魔する看板や電柱など、期待していた温泉街らしからぬ、混沌とした印象を受けたことを今でもよく覚えています」

風情の消えた温泉街

ーその講演から二年後、草津町長となった黒岩氏が湯畑広場再整備の相談に北山氏のもとを訪れたことで、プロジェクトが動き出しました。

「町長からの依頼を受けた後、私たちは草津温泉の歩んだ歴史を遡り、どのようにして趣が失われていったのかを探ることから始めました。そうすると、高度経済成長期に温泉旅行のスタイルが大きく変わったことが今の草津温泉の形成に深く関わっているとわかったわけです。来草の目的が古くから続く『湯治』から、『団体旅行』や大ブームとなった『レジャー』に移り変わったことで、伝統工法を使用した木造の旅館が次々と姿を消し、大勢の観光客に受け入れられる画一的な大型観光ホテルが建てられたのです。

当時、このような変化は草津温泉だけでなく全国各地の観光地で起こっていました。しかし時は流れ、旅行のスタイルは再び大きく変わってきています。その土地にしかない、その土地らしい魅力を味わうことを求めるようになった観光客にとって、どこに行っても変わらないコンクリート製の大型観光ホテルは魅力に欠けるのか、廃業に追い込まれるホテルの話も聞くようになりました。解体することもできず残された建物が、観光地全体の悩みの種となっています。今後、草津温泉にも同様の問題が起こる可能性があるのです」



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

草津温泉らしい魅力

―大型観光ホテルには、もう一つ大きな問題があると北山氏の話は続きます。

「大勢の観光客を効率的に捌き、より多くの利益を上げるため、食事や入浴、娯楽、土産の購入まで、全てがホテルの中で済ませられるようにつくられていることが問題です。このようなホテルが増えたことで、以前からまちの中にある店舗が減り、大型の宿が連なるだけの温泉街が日本中あちらこちらに生まれたわけです。せっかく温泉街に来たのに遊びに出る場所がなく、夕食後には部屋に備え付けられたテレビを見て過ごす、そんな経験をした人も多いと思います。

草津温泉に来た方に、そのような味気ない時間を過ごさせてはいけないと思うのです。温泉街らしく浴衣を着て、夜のまちをそぞろ歩く、そんな楽しみ方をしてもらうのに湯畑広場は最適じゃないですか。湯畑はベネチアのサン・マルコ広場のように、観光客なら誰もが訪れるまちの中心。唯一無二の資産です。その湯畑周辺を温泉街らしい風情と情緒をもつ場所にすることが、世界の中で草津にしかできない草津製のまちづくりだと町長にお話しました」

賑わいと風情のある温泉街へ

「そぞろ歩きをしたくなる温泉街には賑わいと風情が必要です。そこで私たちは、町長にまち全体をひとつの旅館と捉え、互いに足りないところを補いながら来草者をもてなすまちづくりを提案しました。町長が考えに賛同してくれたので、湯畑広場再整備の方針として、まちづくりの手本となるような名所をつくることが定まりました。新しく名所ができることで、温泉街らしい賑わいと風情が生まれ、そこを核として一本一本の路地も魅力的に生まれ変わっていく。町長と共にそんな草津温泉の未来が想い描けたことで、日本一の泉質を誇る草津温泉に新たな魅力が加わわり、まさしく温泉の殿堂として、世界的な温泉街に生まれ変わるだろうと思いました」



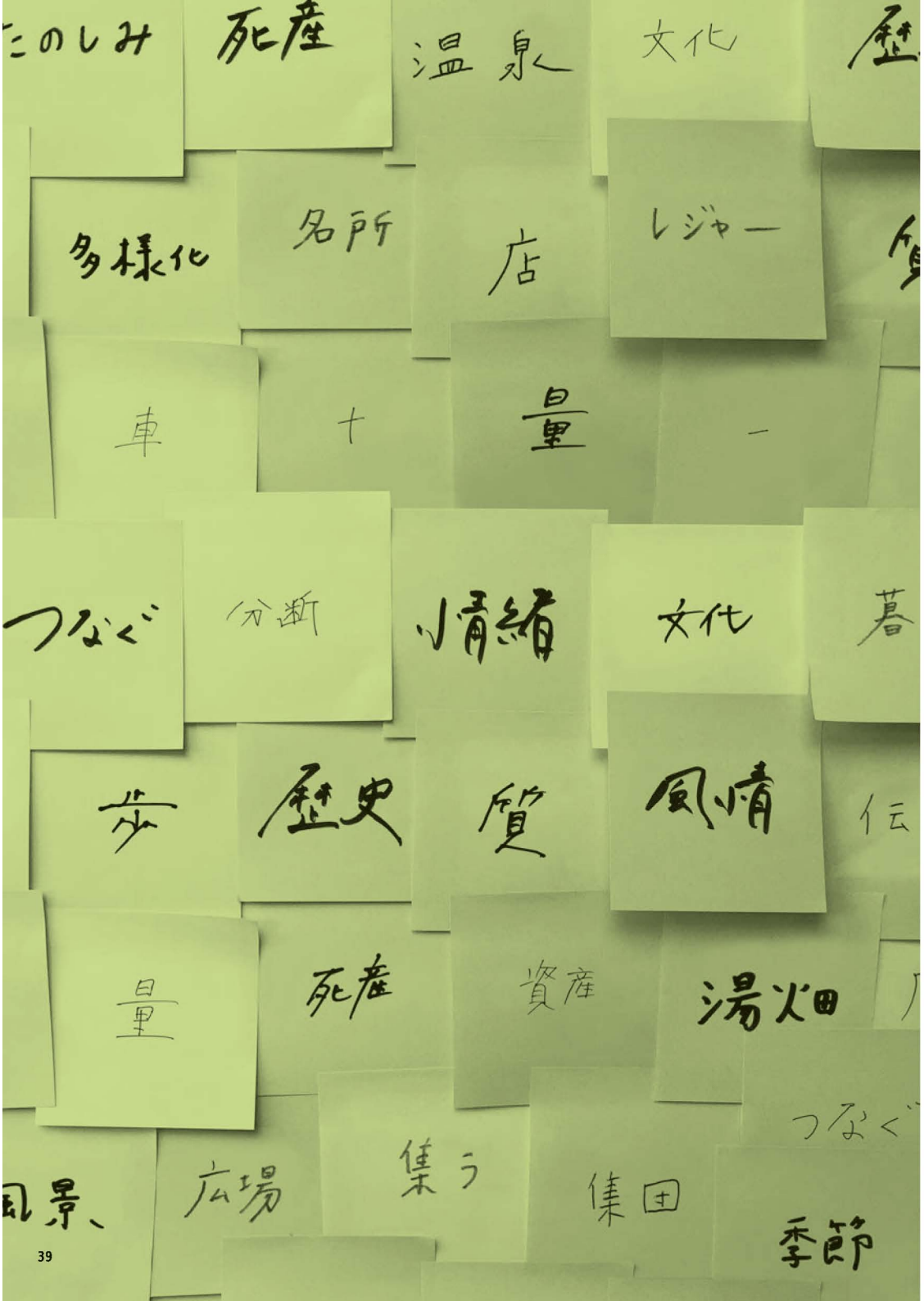
©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



草津温泉の未来を考える
七つのキーワード

草津温泉再興へ向けて、プロジェクトは動き出しました。まずは草津温泉のあるべき姿について考え、議論を重ね、七つのキーワードを抽出しました。これらのキーワードは、これから始まるまちづくりの素となる大切な道標です。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



歴史と文化

まちにはそこにしかない歴史があり、そこにしかない文化が根付いているものです。それはまちのかけがえのない個性であり、来訪者にとっての魅力となります。草津には、今から一八〇〇年余り昔にまで遡ると言われる温泉地としての長い歴史があります。また湯もみや時間湯など、稀有な泉質を活かした、他にはない温泉文化が今も受け継がれています。貴重な自然環境や先人たちへの感謝を忘れないためにも、独自の歴史と文化を活かしたまちづくりが必要です。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

資産と死産

まちの歴史や文化、自然は、住民の誇りとなり日常を彩る大切な「資産」です。一方で、本来ならば資産となり得るものが全く活用されていない「死産」もまちの中には存在します。日々の暮らしの中で埋もれてしまった「死産」を掘り起こし、もう一度「資産」として再生するには、来訪者の視点でまちを見ることも肝心です。例えば草津温泉では、湯畑を見下ろす位置にある光泉寺へ向かう際、駐車場を通り抜けるかのように参道を通ることになり、多くの人がもったいないと感じていました。その「もったいない」に気づくことが資産を再生する第一歩です。

車から歩

今でも乗用車保有台数が増加し続けている日本では、まちのスケールが徒歩から車へと変わり続けています。拡幅される車道、増え続ける駐車場、ロードサイド型の店舗、巨大ショッピングモールなど、人の姿の見えないまちづくりが進んでいます。しかし、どんな時代にも、まちには人々が行き交い、出会う場が必要です。歩くと人に出会える。歩くと自然の気配を感じられる。歩くと美味しい食べ物や面白い土産を見つけられる。日本の温泉街では、車のための「道」ではなく、歩くための「路」が必要なのです。

©２０１８草津町役場, Created by（株）北山創造研究所

量より質

戦後、日本経済の発展に比例し、私たちは多くのものを抱え生活するようになりました。しかし大量生産・大量消費・大量廃棄を続けていては、社会が立ち行かなくなってきていると、多くの人が感じています。実はまちづくりでも同じようなことが起こっています。量を追求するあまり、限界まで大きく建てられたビルが増えすぎた結果、空や緑などの景観を覆い、まちの魅力を奪っています。よく聞く話です。しかし私たちの生活も成熟し、これからは建物にも地域に対する作法を求める時代となりはじめています。かつて主流だった団体旅行から個人旅行へと人々の趣向が変化したこれからは、建物も「量」より「質」に切り替えることが求められています。

観光地や商業地域には、広告や看板など、消費を促す情報が氾濫しています。また、至る所に設置された自販機が常に消費の機会を窺っています。知らず知らずに私たちは、こうした環境が生み出す消費への圧力に疲れてしまってはいないでしょうか。何かを補うのではなく、目につきやすい過剰な情報

十から一

や調和を乱すものを取り除くことが、草津温泉を趣ある街なみに戻すための近道です。個人の欲を抑え、まちの調和を優先する。実行するのは難しいですが、景観づくりを草津温泉全体で取り組むべき課題として捉え、それぞれができることから引いていくことが大切です。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

分断からつなぐ

名所をたくさんつくればまちは再興するのでしょうか。たとえ洗練された宿や魅力的な美術館があっても、それぞれが分断されていては、旅行者は苦労して移動したことばかりが思い出になってしまうかもしれません。名所はあくまでひとつの点。点と点をつなぐ線があってはじめて、面としての賑わいが生まれるのです。路地は名所と同じくらいまちにとって無視できないものです。名所をつなぐ路地に風情や賑わいが広がり、まち全体に人が溢れる。草津温泉でも湯畑から共同湯へ、旅館から商店へ、遠くはスキー場や白根山まで、その道々まで楽しめる路地が必要です。

風情と情緒

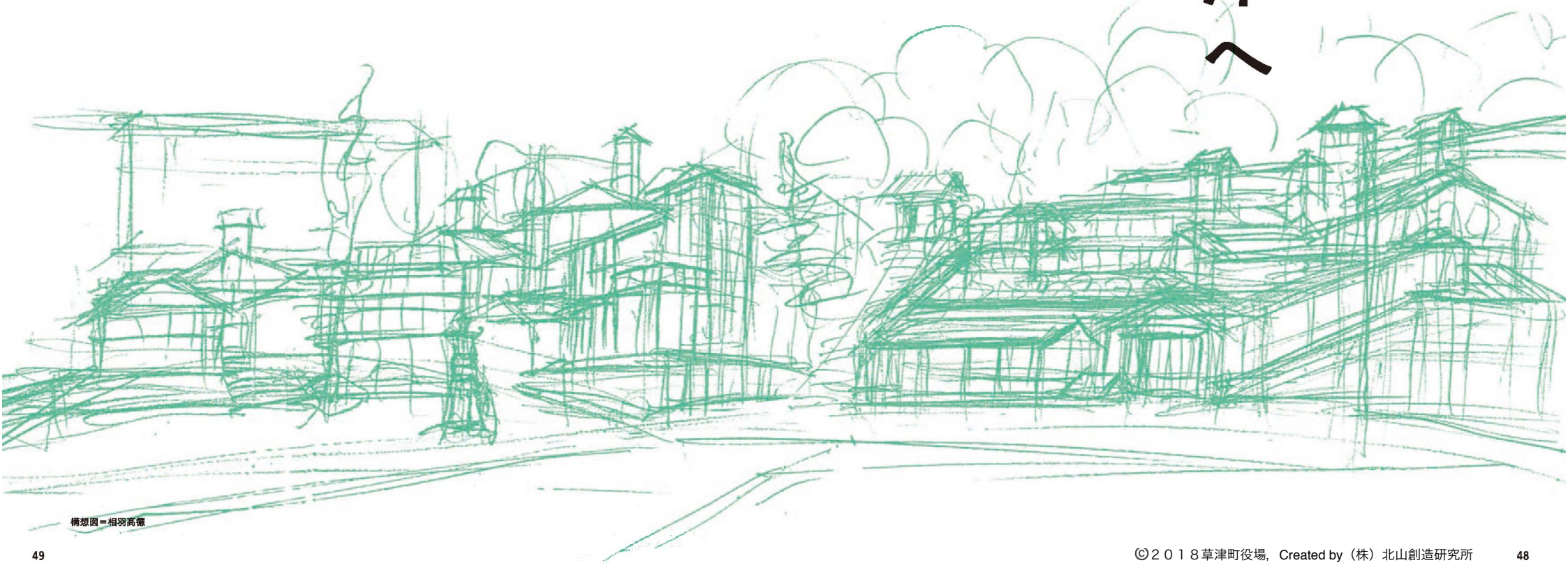
グローバル化が進み、世界中の生活が均質化する現代。日々の暮らしから失われつつある地域特有の行事や祭り、風習、食文化が大きな価値を持ち始めています。観光についても、大都市を訪れる楽しみがある一方、特に都心に暮らす人々や外国からやってきた観光客にとって、日本製の文化や自然に触れる質の高い体験は何にも代えがたい一生の思い出となることでしょう。

草津温泉には、湯もみや時間湯など他の土地にはない伝統文化を体感できる場がいくつもあります。また伝統工法を用いた木造の建物が軒を連ねる路地もあります。これらは草津温泉にしかない「風情」と「情緒」です。この日本製・草津製の「風情」と「情緒」を最大限尊重することが、これからのまちづくりにおいて最も重要なことです。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

草津に埋もれている歴史と文化を掘り起こし、この土地にふさわしい名所をつくること。そして、その名所をつなぐ風情と情緒あふれる路地をつくること。温泉客がそぞろ歩きを愉しみ、昼も夜も観光客で賑わう唯一無二の感幸地（かんこうち）へ。草津温泉再興を目指し、七つのキーワードから導かれたまちづくりの方針に基づき「湯畑広場再整備計画」に向き合い始めます。

そして、世界の草津へ



構想図＝相羽高徳

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

集う男たち チョイナ チョイナ

プロジェクトチーム発足

「湯畑広場再整備計画」（以下、本計画）の具体化にあたって、北山創造研究所によって集められたプロフェッショナルが二名、プロジェクトチームへ加わります。



＜事業主体＞

草津町役場

黒岩町長のリーダーシップのもと、草津の魅力向上と100年先の草津温泉に受け継がれる、歴史をなぞらえたまちづくりに取り組む。本計画では、町のシンボルである湯畑に面する町営駐車場二カ所の整備を決定。関係者の多いまちづくり事業ながら、担当者一丸となって迅速な合意形成に取り組む。本計画と並行して「街なみ環境整備」も実施した。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

＜プロデュース＞

北山創造研究所　北山孝雄

草津町での講演をきっかけに本計画に参加。町長と共に草津町を温泉の殿堂とすべく、まちづくりの方針をまとめる。基本構想段階では、コンセプト立案、敷地用途提案、施設サービス提案などを行う。また計画の推進、プロジェクトチームの編成や調整、基本構想書の制作を担当し、計画の中心的な役割を果たす。





＜総合演出＞

グラフィクスアンドデザイニング
相羽高徳

独特の視点と徹底した空間表現へのこだわりによって感動空間をつくる空間プロデューサー。代表的なプロジェクトに「新横浜ラーメン博物館」「箱根☆サン＝テグジュペリ星の王子さまミュージアム」「NINJA AKASAKA」「羽生PA 鬼平江戸処」など。
本計画では企画や構想図を担当し、実現に向けて明確なイメージを創り出した。



＜設計＞

K計画事務所　北山孝二郎

住宅から大型商業施設まで幅広く手掛ける建築家。代表的なプロジェクトに「サンストリート亀戸」「横浜ベイクォーター」「羽根木インターナショナル」など。
本計画には平成23年より参加し、施設の基本設計・実施設計から現場監修までを担当し、主に設計段階で重要な役割を果たす。

考える男たち

基本構想書「草津めぐり」

計画の基本構想は、草津の情報収集・調査から始まりました。郷土史や統計、観光雑誌からだけでなく、SNSや来草者へのインタビューなどを通した多角的な調査で来草者目線の印象を収集し、実感に基づいた草津温泉の課題を洗い出していきました。

草津の資産は何か。草津には何が求められているのか。それに応えるために、まちはどうあるべきなのか。

集めた資料を並べ、プロジェクトチームでの議論を重ね、徐々にまちづくりのコンセプトや計画地の利用方法、施設のデザイン、サービスが決まっていきました。この議論の内容は、年度ごとに基本構想書「草津めぐり」としてまとめられます。一般的な報告書ではなく、一冊の本としてまとめられた基本構想書は、プロジェクトへの共通認識を生み出す重要な役割を果たしました。

まちづくりのコンセプト

基本構想書の中で、北山創造研究所は「草津　湯源湯路街」というまちづくりのコンセプトを提示しました。

日常を離れた「桃源郷」のような草津温泉となるべく、日本一の自然湧出量を誇る「湯源」をより一層大事にしていく。草津温泉に古くから伝わる「湯治」の文化を守り、良質な温泉を求め、まちの隅々まで人々が行き交う「湯路」をつくりたい。

コンセプトには、このような想いが込められています。



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所









平成22年度　草津めぐり１

最初の構想書には、まちづくりのコンセプト、イメージのほか、本計画敷地に対する敷地用途・施設構想図・施設サービスなどがまとめられている。

平成23年度　草津めぐり2

前年度に作成した構想書に基づき、施設の設計が始まる中、施設完成後に取り組むべき路地の風情づくりや夜の賑わいづくりなどがまとめられている。

平成25年度　草津めぐり３

本計画でつくられる施設の活用計画、イベント提案、新しい名物の提案など、サービスやコンテンツについてまとめられている。

平成27年度　草津めぐり４

草津温泉に夜の風情を創りだす新しいプロジェクト「灯路計画」が具体化し、湯畑と西の河原公園の照明演出コンセプトと構想図がまとめられている。



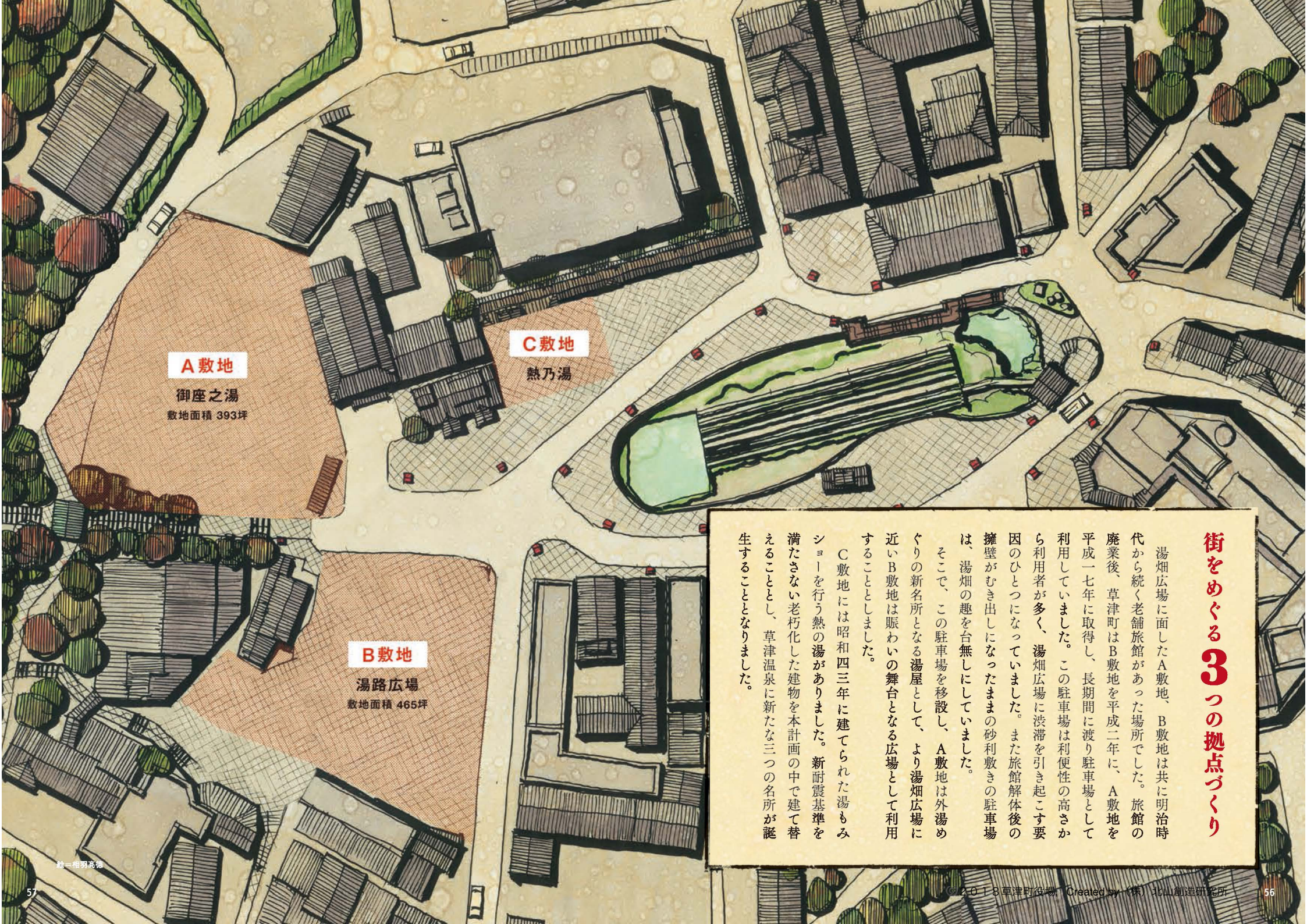
草津湯源湯路街

とうげんとうじまち

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

湯の源として湯に守られ育まれ
同時に守り育む、極楽桃源郷のまち草津。
湯がめぐる街並みを、湯を求め、湯をめぐる。
そして、迷い込むように路地をめぐり
湯治として、心も体も癒される。
世界の温泉郷・草津は
湯をなによりも大切にし、路を活かすことで
湯の街の魅力を磨いていきます。

基本構想書「草津めぐり 1」より



街をめぐる3つの拠点づくり

湯畑広場に面したA敷地、B敷地は共に明治時代から続く老舗旅館があった場所でした。旅館の廃業後、草津町はB敷地を平成二年に、A敷地を平成一七年に取得し、長期間に渡り駐車場として利用していました。この駐車場は利便性の高さから利用者が多く、湯畑広場に渋滞を引き起こす要因のひとつになっていました。また旅館解体後の擁壁がむき出しになったままの砂利敷きの駐車場は、湯畑の趣を台無しにしていました。

そこで、この駐車場を移設し、A敷地は外湯めぐりの新名所となる湯屋として、より湯畑広場に近いB敷地は賑わいの舞台となる広場として利用することとしました。

C敷地には昭和四三年に建てられた湯もみショーを行う熱の湯がありました。新耐震基準を満たさない老朽化した建物を本計画の中で建て替えることとし、草津温泉に新たな三つの名所が誕生することとなりました。

絵＝相羽高徳

©2018草津町役場 Created by (株)北山創造研究所



絵＝相羽高徳

一

明治時代に途絶えた幻の湯屋
「御座之湯」再建

江戸～明治時代にかけて湯畑のまわりには、御座之湯、綿の湯、かっけの湯、滝の湯、鷲の湯という草津五湯と呼ばれる共同湯がありました。中でも御座之湯は、源頼朝が三原野に狩りに来た際に腰かけた石があった事から、この名前が付いたと言われています。本計画では、A敷地に外湯めぐりの新名所として、この由緒ある御座之湯を再建することとしました。

構想図には、かつての御座之湯の姿をイメージし、とんとん葺きの屋根が連なる木造の建物が描かれています。印象の薄かった白旗源泉も屋根をかけて趣を持たせます。

御座之湯には共同湯の他にも、温泉街のまち歩きが楽しくなるようなサービスを詰め込みたいと考えました。建物をつくるだけでなく、そこがどのように使われるべきなのか、そこまで含めて構想することが重要です。外観もサービスも、草津温泉の新しいまちづくりの手本とされるよう想いを込めて構想しました。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

「御座之湯」は草津温泉をめぐるすべての人たちの拠点に

まちの番台



ようこそいらっしゃいませ。草津温泉には、御座之湯をはじめ個性ある外湯がそろっております。こちらでは草津温泉のことはもちろん、群馬県のことは何でもご案内いたします。みなさまの旅のひとときが忘れがたいものとなるよう、そして草津温泉にまた訪れたいと思っていただけるよう、最新情報を取りそろえてお待ちしています。

浴衣貸し出し



草津温泉では、日帰りのお客さまにも浴衣でのそぞろ歩きを愉しんでいただきたいと思っています。湯上りの火照った体に浴衣をまとえば、身も心も開放的になり、温泉街へ繰り出す準備は万端です。各宿の浴衣姿の宿泊客に混じって、日常を忘れ、草津温泉の世界に浸ってみてはいかがでしょう。

大広間「湯源之間」



御座之湯の二階には、まち一番の特等席がございます。湯畑はもちろん、湯けむりに包まれた草津温泉の街なみを一望できる大窓は、訪れた人々の心を癒やします。湯上がりのひととき、この場所でまちを眺めながら、草津の歴史に思いを馳せてみてください。

共同湯

草津温泉を訪れた誰もに伝統的な湯治文化を体験して欲しい。そんな想いで御座之湯は生まれました。草津の温泉の効能を最大限に引き出すために、あえて肌に残るお湯を洗い流ささず出てください。洗い場が少なくびっくりするかもしれませんが、ここは温泉に向き合うための浴場なのです。





絵＝相羽高徳

二　まちを舞台に　まちの舞台に
湯畑を劇場に変える「湯路広場」

朝昼晩、春夏秋冬、その時々の催しを行えるまちの舞台が草津温泉には必要でした。広場があれば、自然とそこに人が集い、新たな出会いや発見が生まれます。

構想図には、高低差を活かした棚田状の広場と、広場を取り囲むように設けられた回廊が描かれています。まるで湯畑に対する観客席のようでもあり、舞台のようでもあるこの広場は、七〇年近い歴史のある草津温泉感謝祭をはじめ、様々な催しで活躍する予定です。また新しい景観をつくり、雪の季節にも歩きやすい歩道ともなる回廊は、熱乃湯の敷地内から移設された公共トイレへとつながっています。

朝市・夜市



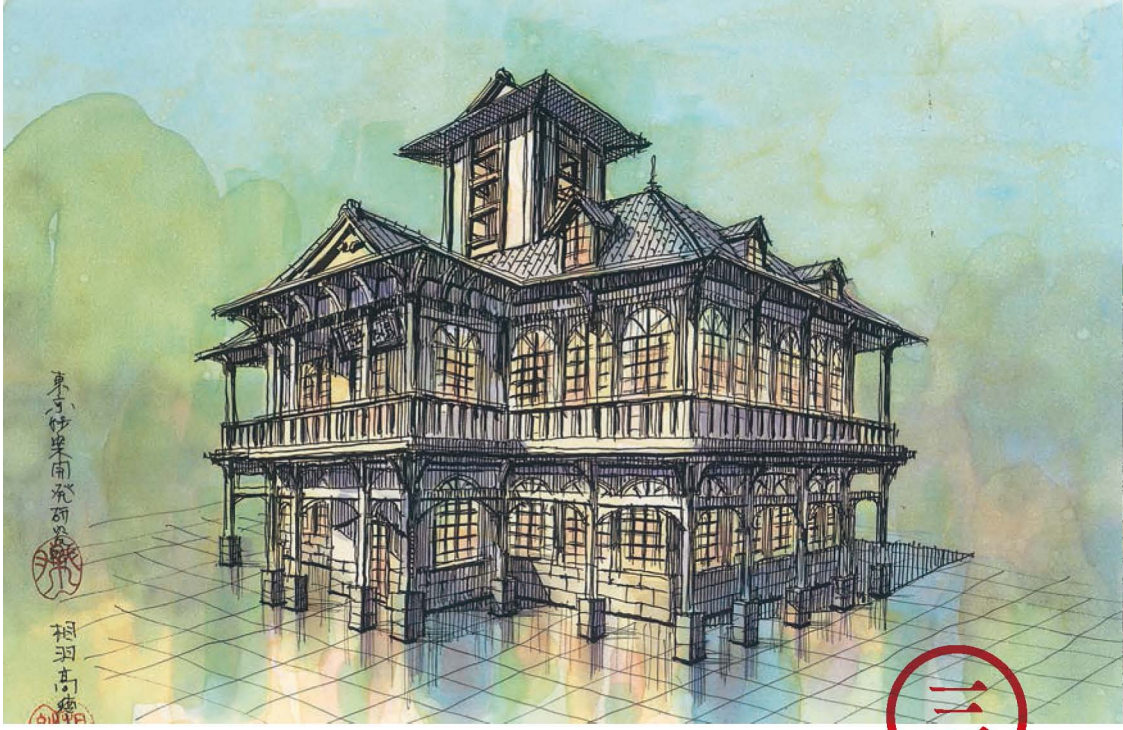
せっかく草津温泉に来たのだから、地のものを食べてみたい！そんな期待に応え、早朝や夜に群馬県産の野菜や郷土料理、地酒やおつまみを楽しめる市が開催されます。

大道芸



どこからともなく聞こえる鐘の音を頼りに路地を進むと、広場に紙芝居のおじさんと子供たちが集まっています。どこか懐かしく愛嬌たっぷりの大道芸人たちは、大人も子供も楽しませます。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



絵＝相羽高徳

三　湯もみの伝統を後世に伝える
娯楽の中心を再生する「熱乃湯」

かつて浴場のひとつだった熱乃湯では、他の浴場と同様に、五十度を超える源泉を冷ますために、草津節などの草津湯もみ唄で調子を取りながら、六尺板で湯をもんでいました。また最盛期には六ヶ所の浴場で行われていた、湯長の号令に合わせて時間を区切って入浴する時間湯という集団入浴法も行われていました。その後、昭和三五年から湯もみショーを行うようになり、昭和四三年には観光施設として建て替えられました。

本計画では、新耐震基準に適合する安全な建物にすることはもちろん、大正時代の擬洋風建築をモチーフに、草津温泉の歴史をなぞらえた建物に生まれ変わります。

湯もみ



草津温泉の伝統文化である湯もみを草津節に合わせて見たり、体験したり。在りし日の草津温泉へタイムスリップしたかのような時間を過ごせます。

温泉落語



建て替え前も好評だった温泉落語や催しに対応するため、新しい熱乃湯にも舞台がつくられます。草津温泉の娯楽の中心として、様々なチャレンジを行い、さらに魅力ある催しを行っていきます。



湯畑整備事業スケジュール

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
御座之湯	擁壁改修 設計／工事 基本設計 実施設計	竣工 建築工事		
湯路広場		基本設計 実施設計	竣工 工事	
熱乃湯			基本設計 実施設計	竣工 建替工事

段階的に実現する名所づくり

本計画の実現に向けて、予算や設計・工事にかかる期間、完成後の反響を考慮した結果、名所づくりは段階的に実施していくことになりました。具体的には、初めに湯治を味わえる湯屋「御座之湯」を、次にまちの舞台「湯路広場」を、最後に伝統文化を伝承する「熱乃湯」を一年ごとに完成させていく計画です。

一度に全てを完成させてしまうと唐突にまちの中に新しい街なみが生まれてしまいます。段階的に新しいものが生まれることで、既にあるものと新しいものをより深く結びつけて街なみをつくっていけると考えました。また町民の方にとっても新しい人の流れにスムーズに対応していただけたり、本計画への理解を深めていっていただける良い期間になるのではと考えました。

草津温泉のＰＲという面からみても、毎年新しいニュースを全国に向けて発信できるので、草津町のまちづくりに関心を持ってもらえたり、より多くの人に情報を届けることができるのではないかと予測したのです。こうして計画はついに実現に向けて走り出します。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



第三章
湯源湯路街、現る

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



平成二二年の御座之湯計画地

町営駐車場だった頃。奥にある
剥き出しの擁壁が湯畑の風情を
台無しにしていました。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

一

平成二五年 御座之湯開業



完成した御座之湯。明治
時代の趣を残す木造建築
として再建された。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

入り口には吹抜空間が広がり、番台が出迎える。吹き抜けは二階の大広間につながる。



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



ふたつの浴室には、伝統的な建築様式に習い、湯気抜きが設けられている。

御座之湯が完成し、湯畑からの景色は一変した。光泉寺の参道も凛とした佇まいに見える。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

草津温泉の新たなシンボル

御座之湯

ござのゆ

平成二三年六月、町議会で議員全員の賛成を得て、「湯畑広場再整備計画」が承認されます。その後、設計期間・施工期間を経て、平成二五年四月、湯源湯路街構想の第一段、御座之湯が開業しました。

御座之湯は、江戸時代より草津温泉で多くの建物に取り入れられていた伝統的な建築様式の「せがい出し梁造り」を用い、切妻屋根を湯畑正面に配する造りとなっています。当時の建築様式を踏襲することで、百年前の草津と百年先の草津をつなぐ「まちづくりの手本」として、湯畑に向き合っています。



御座之湯の二階には四五畳の大広間を設け、湯畑を一望しながら、湯上がりに畳の上でゆっくりくつろいでいただけます。また近隣の温泉宿のご協力により貴重な草津温泉の歴史資料を飾ることができたので、まちの歴史や文化を伝える資料館のような役割を持つことができました。そして日帰りのお客様でも浴衣を着てそぞろ歩きを愉しんでいただきたいという願いから、番台では手頃な価格での浴衣の貸し出しサービスを行っています。

その他、御座之湯の題字を町民でもある書道家の方にご提供いただき、さらに趣を増すことができました。町民の皆さまと一体となって形になった御座之湯は、開業当日から長蛇の列となり、まさしく草津温泉の新たなシンボルとなりました。



©２０１８草津町役場, Created by（株）北山創造研究所



二

平成二六年 湯路広場完成



平成二二年の湯路広場計画地

御座之湯計画地と同じく町営駐車場でした。説明する必要が無いほどに湯畑周辺の景観を害していました。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



完成した湯路広場（手前）と御座之湯（右奥）。広場を囲む回廊の屋根が幾重にも連なり、かつての草津温泉の風情を蘇らせた。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

平成26年8月の草津温泉感謝祭にて。棚田状の広場が観客席のように使われている。



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

回廊と一体化したトイレ棟の吹抜け空間。平成27年に日本トイレ大賞（空間部門賞）を受賞した。

©２０１８草津町役場，Created by ㈱ 北山創造研究所



住民に活用されるまちの舞台は、同時に来草者にとって魅力ある空間となる。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

広場は成熟社会の必需品

湯路広場

とうじひろば

前年に開業した御座之湯に続き、湯源湯路街構想の第二段、湯路広場が完成しました。

湯路広場はまちの舞台に、そして草津温泉のまち歩きの拠点となるよう構想されました。浴衣姿で下駄を鳴らし外湯めぐりを楽しむ、温泉街らしい光景を生み出すには、宿の中にはないまちの楽しみが必要です。ここでは、草津温泉感謝祭や白根神社祭礼などのお祭りを始め、かまくらやキャンドルを使ったライティングイベント、ジャズライブ、「草津味しるこ」や伝統行事「氷室のふるまい」など、様々な催しが行われています。季節ごとの催しで町民の方が集まるこの場所はまちの舞台であり、来草者にとってはここでしか味わえない体験ができる場所となりました。

エリアの高低差を活かしてデザインされた棚田状の広場には、段に腰掛け湯畑周辺の賑わいをゆったりと楽しむ観光客の姿が多く見られ、まち歩きの休憩スポットにも使われています。

湯路広場について北山孝雄はある雑誌のインタビューで次のように答えています。

「高度経済成長期の必需品といえば、車、家電製品というモノでした。しかし、成熟した社会においては、人々はモノだけでは満たされないし、感動しない。広場というのは、いわば成熟社会の必需品なんです。この広場が評価されているのは、人々が利用するのにお金が一銭もかからないこと。商業施設の中でお金を使わなきゃいけないという強迫観念から解き放たれ、心から楽しむことができるのだと思います。」





©２０１８草津町役場　Created by（株）北山創造研究所



平成二二年の熱の湯

昭和43年に建てられた旧「熱の湯」。耐震補強が必要となり、建替えることとなりました。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



三

平成二七年 熱乃湯再建



新しくなった熱乃湯。ここでは一日6回の「湯もみと踊り」ショーを開催しており、毎日大勢の観光客で賑わっている。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



湯畑からみた熱乃湯。いくつもの時代を経てきた草津温泉らしく大正時代の風情を今に伝える。

©２０１８草津町役場、Created by（株）北山創造研究所



湯路広場から熱乃湯を望む。
熱乃湯も周囲の建物との調和を第一に計画されている。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



毎晩8時より開催される草津温泉らくご。夜の娯楽として、観光客が宿から出てくるきっかけとなっている。

© 草津町役場, Created by （株）北

伝統を後世に伝えまちに娯楽を生む

熱乃湯

ねつのゆ

湯源湯路街構想の第三段、熱乃湯の再建が終わり、男たちが創りあげたプロジェクトはひとつの節目を迎えました。

熱乃湯では、草津温泉の伝統的な入浴方法「時間湯」の際に行われる「湯もみ」を「湯もみ唄」にのせて観光客に披露する場であるとともに、夜には「草津温泉らくご」を愉しめる劇場でもあります。

午後三時には、高村光太郎も昭和初期に自身の詩に記した「開湯ラッパ」を再現したラッパの音が熱乃湯から湯畑へ響き渡ります。その他にも「湯けむりジャズ」など、様々なイベントを不定期で開催しており、草津温泉の娯楽を象徴する存在となっています。

大正時代に数多く建てられた和洋折衷の建築スタイル「擬洋風建築」をモチーフに構想された熱乃湯は、百年前の大正時代の湯畑周辺の景色を感じさせます。

「御座之湯」「湯路広場」「熱乃湯」はともに湯畑広場に面しており、かつ宿や飲食店、神社などいろいろな建物に挟まれて存在しています。湯畑から眺めると、町所有の建物が他の建物と入り混じって、新たな景観がつくり上げられていることがわかります。

明治・大正・昭和の風情ある景観を取り戻すことで、古より続く由緒ある温泉地のイメージを再構築しながら、これからの時代の観光地として再生させる。このような草津町の試みが形になったことを感じていただけるはずです。





©２０１７草津町役場, Created by（株）北山創造研究所

こうして草津温泉は
かつての風情と賑わいを
取り戻しはじめました。
が、しかし…

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

夜の草津はさみしいなぁ



草津の夜は美しいか

まだまだ再興に向けてやれることはたくさんある。プロジェクトチームが次に注目したのは、草津温泉の夜の街なみでした。

まちめぐりのための三つの名所ができたことで、まちの中心に賑わいが戻ってきた草津温泉ですが、夜のまちは人気がなく寂しい雰囲気でした。日本の多くの温泉街でも同様のことが起こっていますが、夕食のために宿に戻った温泉客は、食後は館内の大浴場に入り、就寝まで部屋で過ごすので、再びまちに出てくることはほとんどありません。そのため観光施設や土産屋、飲食店も早い時間に閉まってしまい、夜のまちに人気が無くなるのです。魅力のないまちからは、さらに客足が遠のきます。そういった悪循環を払拭するため、夕食後にもう一度まちに出てもらえるよう、夜にしかない魅力をつくろうと次の計画が立てられました。

草津温泉を訪れる人は、温泉街らしい、趣のある夜の街なみを求めている。そんな発想で、湯源湯路街構想の第二期として、灯りの演出により夜だけの風情を生み出し、賑わいをつなげる「灯路計画（とうじけいかく）」に取り組むことになりました。計画の対象となったのは、草津温泉のシンボルである湯畑と、湧き出す源泉によって湯の川が流れる西の河原公園の二カ所でした。そして照明デザイナーの面出薫が新たにプロジェクトチームへ加わり、湯源湯路街第二期「灯路計画」が実現に向かいます。

LPA　面出薫

1950年、東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。1990年、株式会社 ライティング プランナーズ アソシエーツを設立、代表取締役。住宅照明から建築照明，都市・環境照明の分野まで幅広い照明デザインのプロデューサー、プランナーとして活躍するかたわら、市民参加の照明文化研究会「照明探偵団」を組織し、団長として精力的に活動を展開中。北米照明学会・国際照明デザイン賞・優秀大賞、国際照明デザイナー協会賞・最優秀賞、日本文化デザイン賞、毎日デザイン賞などを受賞。著書に『陰影のデザイン』（六耀社）ほか多数。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



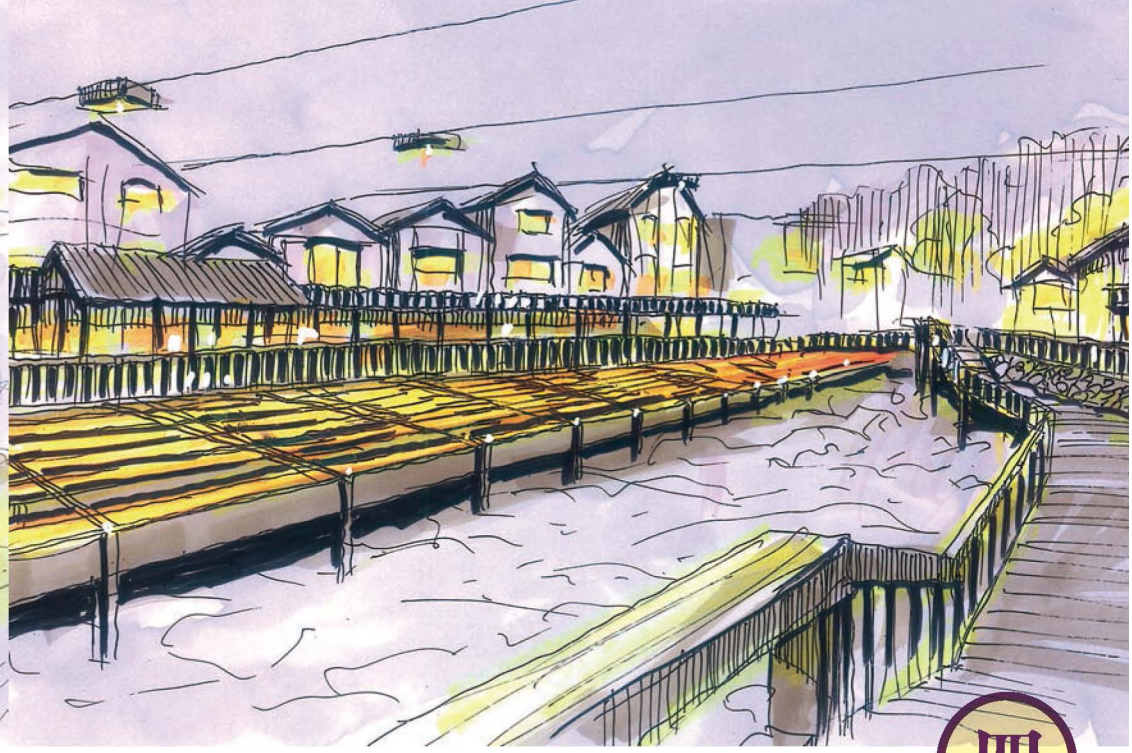
夜の湯畑周辺

夜の湯畑は商店や看板、街路灯、ライトアップイベントの照明器具など、様々な用途の光が入り乱れていました。



夜の西の河原公園

一方、夜の西の河原公園にはわずかな街路灯しかなく、暗く歩きにくい空間が広がっていました。



絵＝相羽高徳

四

草津温泉のシンボル 湯畑が美しく照らし出される「湯畑の灯路」

夜の湯畑周辺を見渡してみると、冬期のイルミネーションイベント用の照明器具、宿や土産物屋の照明など、思い思いの光で照らされた街なみは多くの人たちに統一感のない印象を与えていました。一方で温泉客が歩く足元は薄暗く、雪の季節などは特に注意が必要な状態でした。

灯路計画は、新たな趣向の照明器具を設置するのではなく、あくまで湯畑を主役に美しく照らし出すことを目的にしています。照明器具を整理し、不要なものを取り除く、そして足りない部分を最小限に補うという考えのもと、照明計画は進められました。

具体的には、昭和五〇年に岡本太郎によってつくられた湯畑を囲む石柱を照らし、足元の明るさを補い、湯畑の輪郭を浮かび上がらせました。また源泉が流れる木樋や湯畑から立ち上る湯けむりに照明を当て、夜でも源泉が湧き出る様を感じ取れるようにしました。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



絵＝相羽高徳

五

妖しく幻想的に照らし出される「西の河原公園 灯路」

西の河原公園では、河原のあちこちから源泉が湧き出し、湯の川となって流れています。温泉の香りと湯けむりが漂うこの場所は、湯畑と並び草津温泉を象徴するスポットです。しかしまちの中心から距離があることもあり、夜の照明には乏しい場所でした。

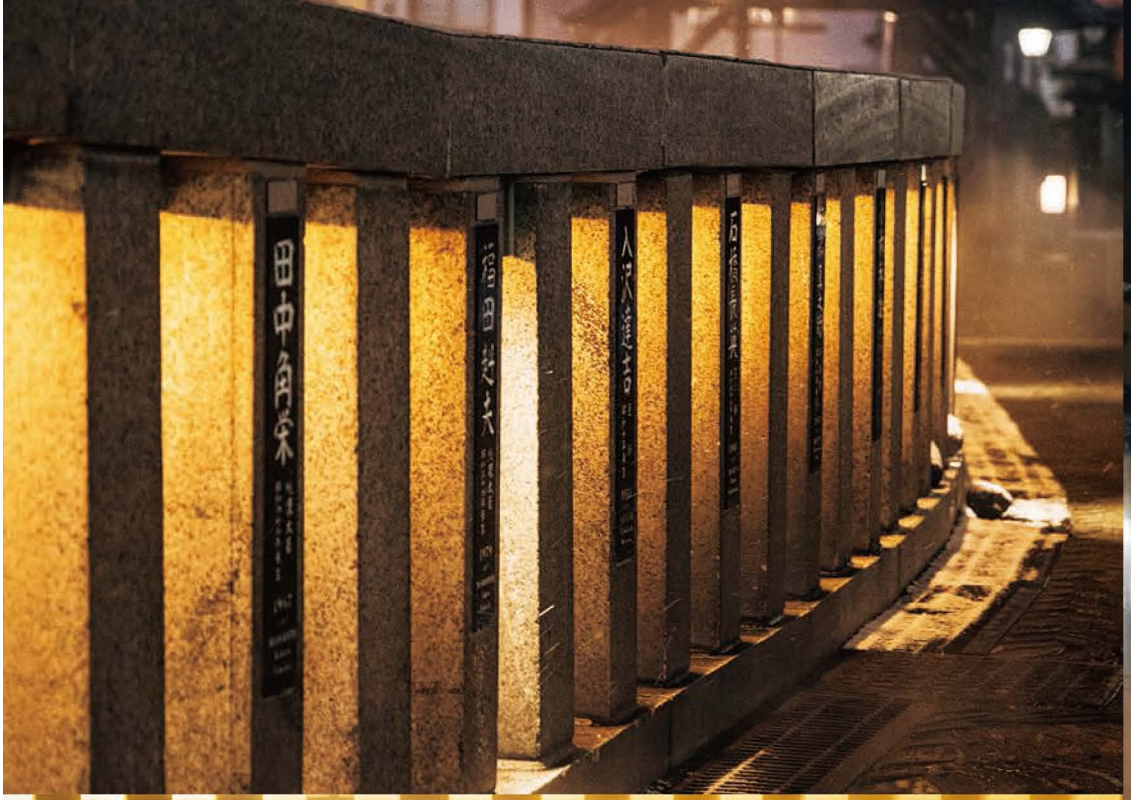
灯路計画では、公園の先にある西の河原露天風呂まで暗い山道を通るのではなく、まわりの自然や湧き出る源泉を楽しみながら歩ける散策道に変えたいと考えました。西の河原公園は、草津温泉の西側にあるため、この名が付いたと言われていますが、その昔は冥土の三途の川のほとりを表す、賽の河原と呼ばれていたこともあったそうです。ここでは湯畑で行った灯路計画とは違い、妖しく幻想的な世界を演出することを目指しました。公園の入口から露天風呂まで続く道は、面出薫と北山孝二郎の共同設計により、照明演出や行灯をモチーフにした照明器具を設置しました。湧き出す源泉や稲荷神社、東屋やベンチ、そして四季折々の木々の様子を照らし、妖しく幻想的に演出された世界が広がっています。



四

平成二八年 湯畑灯路

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所





木樋を流れる源泉や湯けむりが照らし出され、夜にも湯畑の力強さを感じられるようになった。



不要な照明器具を取り除き、石柱を照らすことで美しく湯畑が映し出される。

©２０１８草津町役場、Created by（株）北山創造研究所

新たな演出によって、思わず記念撮影をする観光客が増えている。個人がメディアとなる時代の絶好のPRスポットとなった。

◎２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



五

平成二九年　西の河原公園灯路

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

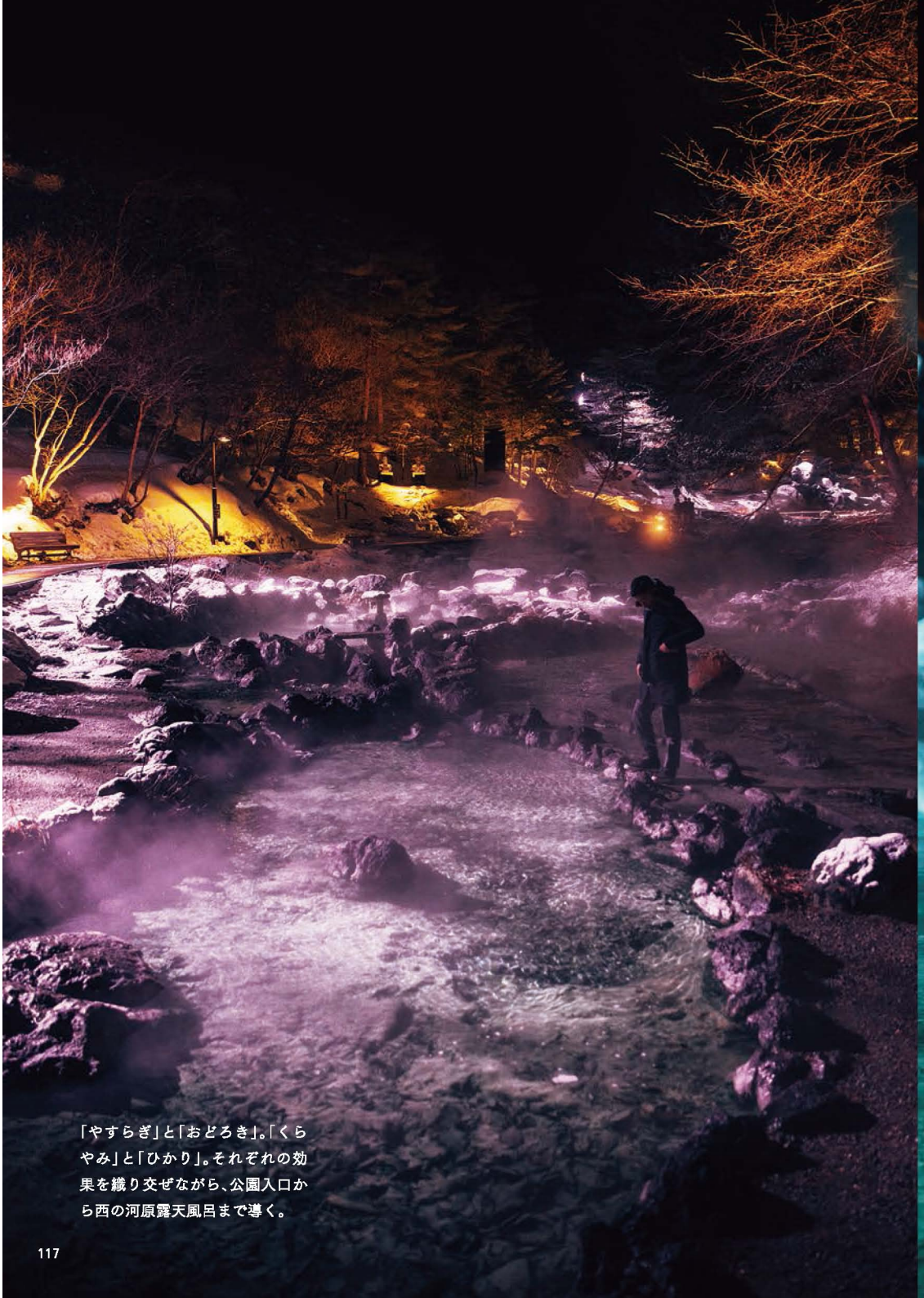


公園内の歩道を誘導する灯籠は、草津の風情に合わせた独自の意匠で制作された。細かい演出にもこだわることが独自の風情につながる。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



四季折々の変化を見せる自然に合わせ、新たな演出は木々が枯れた冬場でも美しく感じられるように計画された。



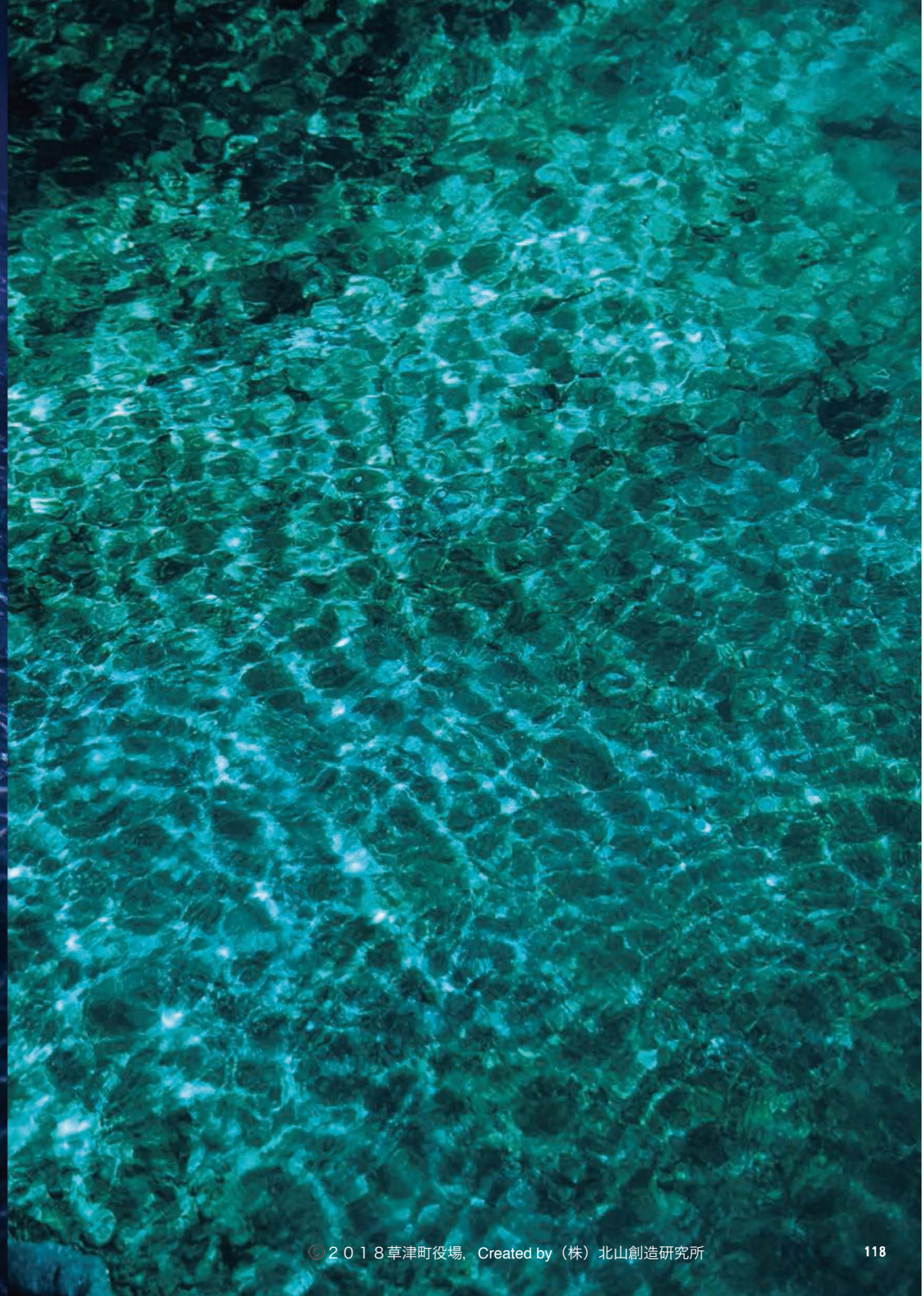
「やすらぎ」と「おどろき」。「くらやみ」と「ひかり」。それぞれの効果を織り交ぜながら、公園入口から西の河原露天風呂まで導く。



昼間は見落とされがちな細かな部分も、光を当てれば夜にしかない魅力へと変わる。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所





©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所





〈プロジェクトチーム座談会〉

まちは楽しいか？

湯

源湯路街構想第二期灯路計画も完成し、ひとつの節目を迎えた平成二九年二月、プロジェクトチームが集まり、プロジェクトを振り返る座談会を開催しました。メンバーは、政治的手腕を発揮しプロジェクトを推し進めてきた草津町長の黒岩忠信氏、プロジェクトの総合プロデュースを行った北山孝雄氏、構想図を描いた相羽高徳氏、そして建築家の北山孝二郎氏の四名。まちづくりの効果や次に行うべきこと、草津の目指す姿について、四名が本音で語り合います。

インタビュアー　村田洋一

まちは良くなりましたか？

―まず最初はズバリ「まちづくりって効果があったの？」という質問から始めたいと思います。第一期の湯畑周辺の三つの名所づくりだけでも、十億円以上かかったと聞いています。この費用は全て草津町の予算から捻出したのでしょうか？

黒岩：御座之湯は（総費用約四億円のうち）一億円の※補助金をもらったんですよ。

※三施設の建設、電柱地中化を含む湯畑広場再整備事業に対する社会資本整備総合交付金を指す。

国から補助金をもらうということは、事業執行上お墨付きをもらったことにもなるんですね。例えば借金をしたとしても九割まで国が面倒を見てくれる、今の制度をうまく利用したんです。以前より町の負担を減らして事業ができる。今回のプロジェクトでは補助金の総額が四億七千万円になったんですよ。町で全額負担することは厳しかった。お金がなきゃやりようがない。

―町の規模から考えても大きなプロジェクトだったと思いますが、効果はどのように感じていますか？

黒岩：実は、私が町長に就任した時には、草津町には約五六億円の借金（起債借入額）があったんです。湯畑広場の再整備は町の観光業のためにやるぞと決意してたんですが、この財政状況だったので、毎年赤字になっていた温浴施設を保育施設に改修したり、客足が遠のいていた共同浴場を改修したりと、財政の立て直しから始めたんです。この表を見てください。〔P131に掲載〕町長に就任してから、これらの改修や今回のプロジェクト、学校関連などへ毎年約九億五千万円の投資（主要事業額）をし続けてきたんです。総投資額は七〇億円にもなる。単純に考えると借金が膨らむと思われるが、実際は借金が三三億円まで減った。積立預金（財政調整基金）も二四億円から四七億円まで増えた。投資の額だけで判断すると、町長が借金だらけにしてるんじゃないかというイメージを持たれるんですが、今回のプロジェクトを含めたまちづくりで行政の会計がものすごく改善したんです。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



行政を豊かにするんじゃなくて、民間の経済を豊かに。

入込客数の推移も見てください。平成二二年度の時点で年間二六五万人まで下がったが、平成二七年度では三〇〇万人を超えてきた。平成二八年度はさらに増える見込みです。まちづくりによって様々なデータに良い変化が起こっています。

私が何のためにまちづくりをしてきたかといいますと、行政を豊かにするんじゃなくて民間の経済を豊かにするため。私は商人で、昔から旅館業の方と取引しているので、町の経営改善が進んでいるかが肌感覚でわかるんですね。行政視点で捉えると、法人税というものがありまして、そういう数字をみても町が賑わっているとわかる。その他にも町営の共同浴場の客数も伸びている。急激に伸びてきているのは、熱乃湯と道の駅とバスターミナルの利用者数。私は可能な限り客観的な数字を弾き出すっていう考え方ですけれども、との数字をとっても経営改善が進んでいる。まちづくりの効果は確実に出ていると思います。

今、どこの温泉地も苦戦しているっていうのが実態なんですけどね。

北山：日本中に温泉ブームをやってきたわけではないのですか？

黒岩：日本全体の温泉地で見るとむしろ逆の流れにあるから、今の草津の賑わいが注目されているということなんです。温泉街もまちづくりをしたかとうかが分かれ道になっているんだと思います。

◉数字で見る草津町

草津町の入込客数

約265万人 → 300万人超

平成22年　平成27年

浴場施設利用者数

約42万人 → 60万人超

平成22年　平成27年

※「御座之湯」「西の河原露天風呂」「大滝の湯」の３施設利用者数

熱乃湯利用者数

約15万人 → 25万人超

平成22年　平成27年

地域ブランド調査市町村別ランキング

全国60位 → 全国41位

平成22年　平成27年　群馬県１位

※ブランド総合研究所調査

ふるさと納税

約14億円

平成28年　北関東１位

主な受賞

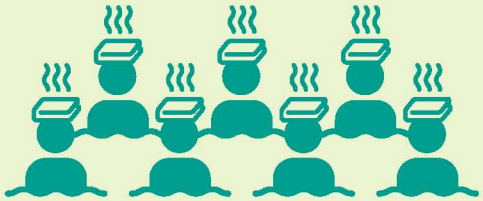
平成29年度
都市景観大賞

平成27年度
日本トイレ大賞

テレビへの露出

45回 → 95回

平成22年　平成27年



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

外国人観光客に対するおもてなしとは？

北山：日本中でインバウンドという言葉が飛び交ってますが、日本国内の観光消費額を見ると外国人が使っているお金は消費額全体の中では非常に少ないんですね。二千万人来て、一兆四千万円。全体の六％未満ですよ。だから高いお金をかけてPRして、多くの外国人に来てもらわなくても大丈夫ということです。

黒岩：草津のインバウンドは全体の四％程度。日本人に支持されない観光地は先行きおかしくなります。

北山：観光の大前提として日本人に好かれないと。日本人が9割ぐらい占めているんやから。

―御座之湯を計画している際に印象的だったのですが、誘導サインは多言語対応で表記しなくてもいいと町長から言われました。

黒岩：国際言語としての英語は必要かと思ったけど、多くの国に対応しすぎると質を下げる。日本に来たんだから日本の風情を楽しめばいい。

北山孝二郎：外国人もそれを望んでなかったりしますからね。

黒岩：私は町長としてインバウンドは受け入れないという姿勢を示しているわけではないし、インバウンドもやらなくてはいけないって言ってますけど、対応しすぎるのは長期的な視点で見るとよくない。

草津でもまだまだ風呂の入り方などで、結構トラブルがあるんですよ。

北山孝二郎：草津に通っていて思いました。最近多いですよね、外国の方も。

黒岩：銀座が一時、外国人に対して過剰なインバウンド対策をやっていたじゃないですか。外国人の旅行スタイルも数年で変わってしまい、今は個人旅行が主流になっています。そういう意味では、爆買いがなくなって銀座も大変らしいですね。

北山：銀座は爆買いビルを建てていて、免税品とかを扱うビルがあるでしょ、あれなんか壊滅的ですよ。オープンして半年くらいしか話題にならない。さらに新しい爆買いビルが今年の春にオープンするのだけど、これなんかもどうなりますかね。

黒岩：私も全く同感です。インバウンドっていうのは、国と国との摩擦によって政情が不安定にると、ガラっと変わってきちゃうじゃないですか。それなのに今は消費する人がいるからって、一時の判断でインバウンド消費用のものを作ってしまうのはものすごく危険だと思う。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

北山：銀座の和光の周辺は外国人がものすごい多いんで、日本人のお客さんが日本橋の方に逃げていてね。

黒岩：そうなっちゃうとまちのあり方が変わってしまいます。

北山：結局、軽井沢もそうなるかもしれない。

黒岩：インバウンドが盛んな所は、基本的にはアクセスが良いから外国人が集まって来てますよね。だんだんとそういう所に飽きてくると、我々みたいなところにも出かけてくるんでしょうけど。

北山孝二郎：草津はアクセスが悪いことが、今になって価値になってきているんですね。すっと行けるところよりも、時間かかってもどうしてもその場所に行ってみたいっていうところが残ってきてますよね。

黒岩：アクセスがいいから、お客が来るっていうのは違うんですよ。



湯畑の灯りとメディア力について

黒岩：湯畑の灯路が完成したら、湯畑ライブカメラのアクセス数が五～六倍になってます。

北山：灯路計画で照明を整理したら、電気代も減るし風情も出るし。

黒岩：以前は照明器具が主役でしたが、そうじゃなくて湧き出る源泉や立ち上る湯けむりが照らし出されるようになり、動きが見える。それがいい。一番はこの轟々たる湯元。これは絶対に他のまちで真似できない。

―実は、湯畑のメディア力が今年になって急激に上がっています。二〇一六年と二〇一七年の一月のある一週間のＳＮＳへの写真投稿数を比較すると、投稿数が五倍、「いいね」と好意的に評価した人の数も九倍近く増えています。圧倒的に夜の写真が増えているんです。

黒岩：ＳＮＳの投稿は、入込客数の増加にも影響してるんでしょうね。

※全国の市町村別魅力度ランキングでも平成二七年の六〇位から平成二八年の四一位になっている。群馬県の中では一番高いんです。

※地域ブランド調査市町村別ランキング

ブランド総合研究所調べ

北山孝二郎：圧倒的やね。まだまだいけそうやね。

これからはどういう まちづくりを 仕掛けますか？

―まちづくりによって、賑わいが戻りつつある草津温泉。しかし、まだまだ手を加えなくてはいけないものはたくさんあると思います。草津温泉に足りないもの、長い目で見てこれから草津はどういう方向に向かうべきかなど、率直な今の気持ちを教えてください。

北山：温泉地も魅せる空間ですから人を驚かせないといけません。驚く、発見があるというのは、ここに来て良かったなという気持ちにつながっていく。

黒岩：そういう意味では、湯畑を見ると「わー！」と歓声が起きるんですね。

北山：温泉地も魅せる空間ですから人を驚かせないといけません。驚く、発見があるというのは、ここに来て良かったなという気持ちにつながっていく。

黒岩：そういう意味では、湯畑を見ると「わー！」と歓声が起きるんですね。

北山孝二郎：湯畑っていうのはどこにもない。まちの中心に広場があるというのは日本では珍しい。人の集まる場所がまちの中心にある非常に優れた資産です。

黒岩：遠い未来の話になると思いますが、将来的には百年前（大正時代）の街なみに近づけたい。大きな建物はなんとなく湯畑の景色と合わないって、町民の方々も感じているみたいですけどね。

　まちづくりの効果だと思うんですが、湯畑広場に面して土産物屋があるでしょう。売上がバブル期の水準まで伸びてきている。バブルの時代の売上を超えたところもあると聞いている。

相羽：土産品で億単位の売上ってすごいですね。

北山：でも新しい名物ができたんだと思ったら違った。前のと一緒ですもん。

黒岩：同じです。

北山：やっぱり新しい土産物を考えたらぇぇのになと思う。そしたらもっと売れますよ。そういう商売のセンスをまち全体で育てな。

黒岩：ビジネスっていうのは突き詰めて突き詰めて、さらに考えて……最終的に何が大事かって言ったら、センス、感性ですよね。どういう感性で商売をデザインするか。長い目で考えることが重要です。

北山孝二郎：今は新しい商品がなくてもいいかもしれないが、最終的にはまちに対して自分たちの商売がどうあるべきかじっくり考えないと。求められているものを提供するだけでなく、自分たちで創造する努力が必要です。建物もコンクリートばっかりでなくて、もっと長い視点で考えないと。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

黒岩：地方の人たちっていうのはね、鉄筋コンクリートが大好きなんです。つい東京みたいにしたいと思っちゃう。昔ですが公共施設をつくる時に「木造でいこう」と言ったら、当時の町長も嫌だって言うんですよ。木造嫌いなんですね。

北山：ええぇ…（驚）たしかに地方の仕事で木造建築を提案すると驚かれる。「北山さん、木造なんかを提案するのですか？」って。

黒岩：今は木材でもある程度の大きさの建物をつくれる。全然雰囲気が違いますよ。例えば、御座之湯・湯路広場・熱乃湯を鉄筋でつくっても誰も感動しないですよ。よくお客さんの声を聞いていると、「歴史を感じる雰囲気が本当に素敵」と。単なる昔の真似でもない。でもその中に風情と情緒があるじゃないですか。これがお客さんにウケてますよね。

―草津温泉のこれからのまちづくりとして、大道芸や屋台のような賑わいをどう増やすか、これは早く考え始めた方が良いのではと最近感じています。

北山：最近はテキ屋が排除されたので、酉の市に行っても楽しくないんですよ。テキ屋さんを排除したらお祭りの賑わいも、三分の一ぐらいに減ってしまった。だから面白くないんですね。公でできるかどうか別にして、テキ屋事業やエンターテイメント事業ってまちの賑わいやと思うんですね。これは必要やと。金魚掬いや輪投げとか数十台作ってまちの中に配備するようなことはできないのかなと思うんです。

北山孝二郎：温泉感謝祭の屋台っていうのは、町の人がやっているんですか？

黒岩：テキ屋が来るんです。草津でもテキ屋は全盛期の半分ぐらいですね。屋台などを営む人が少なくなっていることと、他のお祭りとバッティングしているんですね。やっぱり集客力のあるところに行っちゃう。

北山：現代的なテキ屋事業はないのかなと。役所の中にテキ屋事業部って作れないんですかね。観光協会でもいいしね。僕はどこかのまちで考えてくると思うんですよ。まちを楽しくするための必需品なんですよ。

北山孝二郎：働く人はパートタイムでもいいしね。楽しみながら働ける場をつくればもっと交流が生まれるのではないかなぁ。

北山：ただその人たちの収入が少なかったら、まだ他の職業で働いていた方がいいわってなるんやろうな。人を喜ばすことが好きな人じゃないと。

北山孝二郎：最近神社の縁日でもテキ屋は減っていますよね。お祭りの延長でお神輿を担ぐ感覚で屋台をやれたらええね。

黒岩：湯路広場では、たまに商工会がイベントで賑わいごとをやってます。ただ、テキ屋だからこそ出せる風情のようなものはあるのかもしれない。

北山：嘘も入っているのもいいというか。日本中、まちがきれいになりすぎてるのかもしれんね。ただ草津の場合は、路地とか、きれいにせなあかん所が沢山ある。日本で一番、アジアで一番の草津にどうしたらなるか、考えた方がいいと思うんですよね。相羽さんみたいにディズニーランドの仕組みをよく知る人から見たら、やれることがいっぱいあるでしょう。

相羽：沢山ありますよ。問題はお金だけですよ（笑）ひとつ思うのが、テキ屋さんのようなイベント的なものもいいんですけど、草津温泉っていう名前がね、メディアにとれだけ出るかっていうのが重要だと思うんです。例えば、湯畑の上にロープを張って、そこを歩いていくような人がいるとかね。ギネスに挑戦みたいな話かもしれないし。プロも必要だけれども、それがニュースソースになって、草津でこんなことがあったよっていうのが年間何本つくり出せるか、これで草津はもっと賑わうし変わります。これからはそういうのを積極的にやられた方がいいんじゃないかと思うんですけどね。

北山：ここ（湯畑広場）でスーパー歌舞伎やらやったらええやろうね。



草津温泉という名前がどれだけメディアに出るかが重要。

相羽：面白いですね。舞台組んでね。このもくもくの空間でやったら面白いじゃないですか。

北山：ここまできたら他所にないヤツやるしかないやろうね。

黒岩：木樋のうえに舞台を組めなくはないです。やれたら面白いですね。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

相羽：モナコグランプリって仮設で客席作るじゃないですか、あれと同じように湯畑を劇場にしてそういうのを作れば、結構お金取れると思う。

黒岩：湯畑は区切れないので、どこからでも観ることができちゃうな。どうやってお金を取るのか？

北山：後ろで立ってるのはタダで、座っている人からお金を取れば一万円とか。

相羽：モナコって普段何もないんですよ。でもモナコグランプリの時は、ホテルの値段は変わらないんですけど、十日から一週間泊まらないと取れないんですよ。行くと観光客は百万円なくなります。ホテル費用だけでですよ！お金のある人はクルーザーから見てます。草津にもなんか世界に轟くイベントがないと。あとホテルからも見れるんで、湯畑周辺の宿とか泊まってたらすごく風情があるじゃないですか。一室十万円取れると思います。

北山：宿の幅って松竹梅というか、安いものも高いものも、草津には必要なんじゃないかなと。百年先も考えて幅があればいいと思うんですよね。例えば三千円で泊まれるところもあれば十万円のものもある。

黒岩：草津でも宿の価格設定に幅が出てきました。流行りとして素泊まりが増えてます。素泊まりって普通の温泉地だと、飯どうするんだって話になるじゃないですか。草津の場合はまちづくりを進めてきた効果もあって、今は飲食店がすごく元気があるんですよ。間に合わないぐらいお客さんが来る。

北山孝二郎：もうちょっと食べるところもいい所があればいいんですけど、少ないですよね。ゆっくり休み、ゆっくり寛ぐ。それに合う食べ物があればまた行きたいと思う。

相羽：今の草津で足りないなと感じるのは、食だと思うんです。草津へ何回も行ったけど、美味しいと思ったものが今まで一回もないです。

黒岩：日本の温泉ランキングでカテゴリーがいくつかあるんですが、泉質、雰囲気、地域内の充実、郷土の食事文化、草津温泉は食文化を除いたものが圧倒的に強いんです。エージェントの調査でも泉質はずっとトップだったんです。まちづくりをした後からは、雰囲気や地域内の充実もトップになってるんです。だから、これはまちづくり効果であると。これは嬉しかった。ですけど、なんといっても弱いのが食文化だと。イメージの問題もあると思います。山でなぜ刺身を出すのかって思うんですけど、出さなかったらクレームがあるらしい。蕨とかゼンマ

イだけ出しているわけにはいかないんですよ（笑）

一同：（笑）

北山：それもまた覚悟やね。日本一を目指すなら覚悟して刺身と決別せな。

相羽：食にも松竹梅あっていいんですけど、やっぱりこれは美味いなとか草津に行ったらこれを食べなきゃダメっていうのがほしい。これ作らないと、いつかまたお客さんが飽きて草津に来なくなる可能性だってある。何でもいいのです。

北山孝二郎：でも、きのこしかないもんね。

黒岩：私は半分イメージの問題かなと思ってるんですよ。草津で何があるといいんだっていっても、何にもないんですよね。草津って温泉饅頭だったじゃないですか。いいかげん饅頭には陰りが出てきましたね。

相羽：やっぱり町の人がもっと美味しいものを食べないとダメだと思うんですよ。僕は仕事で美味いもの食べてるからすぐわかるんですよ。もうメニュー見ただけで内容がどうか判断がつくし、最近なんか写真だけで良い悪いがほとんど当たるんですよ。だから訓練だと思う。これからは一食一食大事にしなきゃいけないと思う。草津に行ったらこれ食べたいなというのがあるのとないのとでは、まちの深みが全く変わってくる。特に日帰りのお客さんとかは宿には泊まらないから、ご飯が楽しみになるわけです。例えばラーメンでもいいんですよ。

北山：標高も高いし、食に弱いのは仕方がないかもしれない。例えば日本一の温泉地として地方の美味しいものとコラボレーションもできる。高松と「うどん」で組むとか、宮崎と「牛肉」で組むとか、「ラーメン」なら博多と組むとか、日本一の温泉地に集まる全国の日本一。ゼロから考えるより草津らしいかもしれない。

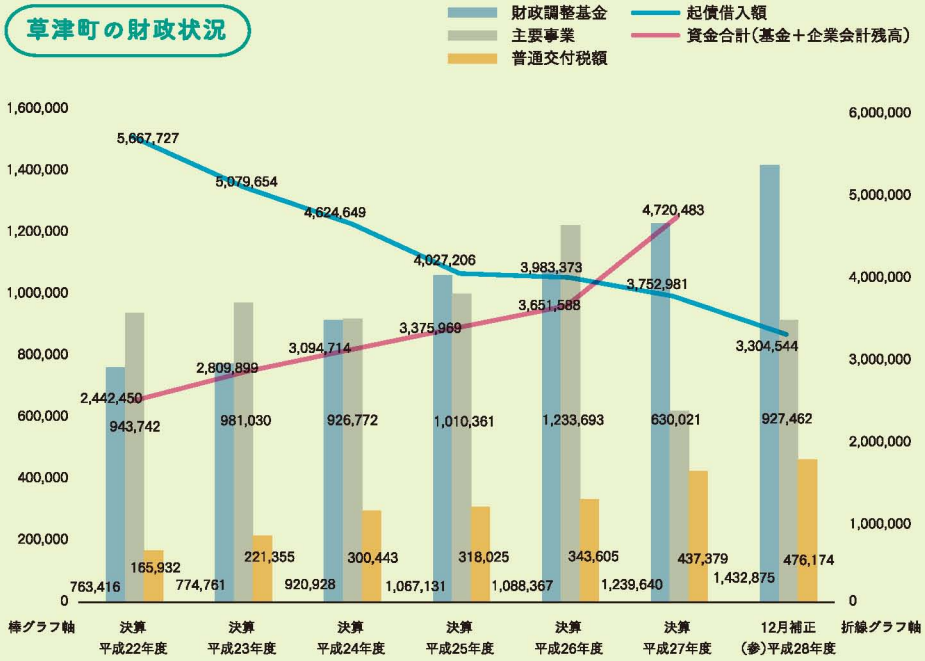
黒岩：飲食店もほとんど地元の人が中心にやっていて、刺激がないんですよね。全然違うところから来た違う人がいきなりお店をやってくれたら、目が覚めると思いますね。ただ空き店舗がないんですよ。みんないっぱいで。でも外からの刺激がきっかけで食も変わってゆく可能性がありますよね。

北山：誰か我々に「一、二店舗、話題になるような店を開発してもらえませんか？」っていう人いませんかね。十坪ぐらいの店でいいんだと思うんですよ。そろそろ民間主体のまちづくりも動き出すと、さらにいい方向に変わっていくと思いますね。

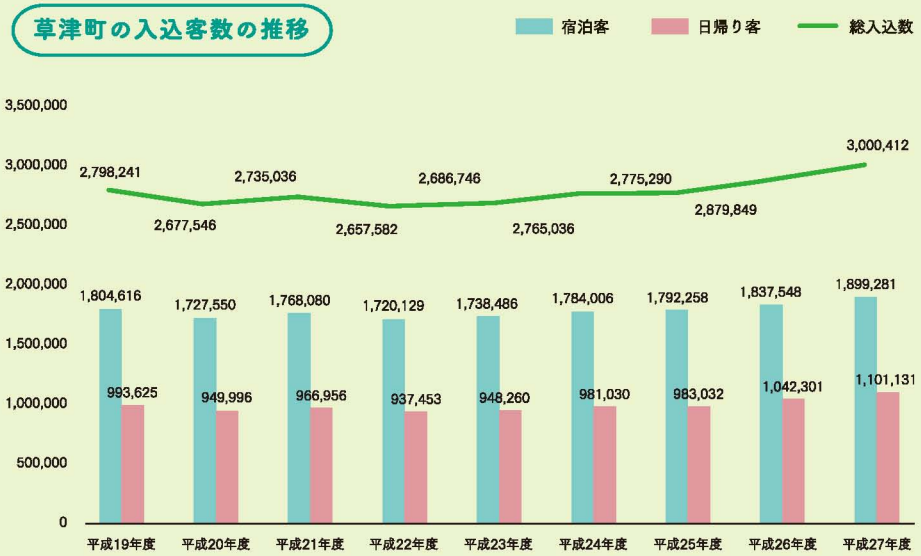
©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

◉グラフで見る草津町

草津町の財政状況



草津町の入込客数の推移



誇りに思える草津温泉へ

I東京でも草津温泉のファンは沢山います。自分でガイドブックを作って自費出版している熱狂的な人もいます。まちづくりをしてきて反響を感じることはありますか？

黒岩：草津町へのふるさと納税で、納税額が百万円クラスの人はいっぱいいるんですよ。一番大きい額で一人、一千万円。

北山孝二郎：それだけ草津を愛する人が増えているということですから。古くからの資産を維持するだけでなく、積極的によくする工夫があればまだまだ魅力を上げられます。

北山：草津の人が、草津に住んでいるという誇りを世の中に知らさなあかんと思うんやけとね。あんまり「私草津です！」って威張ってる人が少ないじゃん。

黒岩：町長してて寂しいんですよ。これだけ劇的に変わったじゃないですか。地元ではあまり評価しないんですよね。当たり前の景色になっていて。それがよそから「草津温泉すごい！」って言われるわけですよ、熊本県知事も会いたいって来てくれてるんですけど…地元ではまだ誇りにつながってないんですよ。寂しくなっちゃうんですね。商売やってる人たちはわかってるんですけど。この熱が一般の方々まで届けばいいですが…。

北山：地元の人が誇りをもたないとね。自分のまちの繁栄の仕方をね。我々のまちづくりも「このまちにくらしたい」って思えることが、一番の目標なんですね。今、評価されている「儲かる」とか「人が沢山来る」とかは、あくまでその副産物のようなものです。これからも地元の人が誇りに思える草津温泉になるよう、行政も民間も一緒になって動いていきたいですね。



このまちにくらしたい、が一番の目標。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

草津よいとこ
一度はおいで
アドッコイショ
お湯の中にも
コーリャ
花が咲くヨ
チョイナチョイナ

「草津節」の一節より



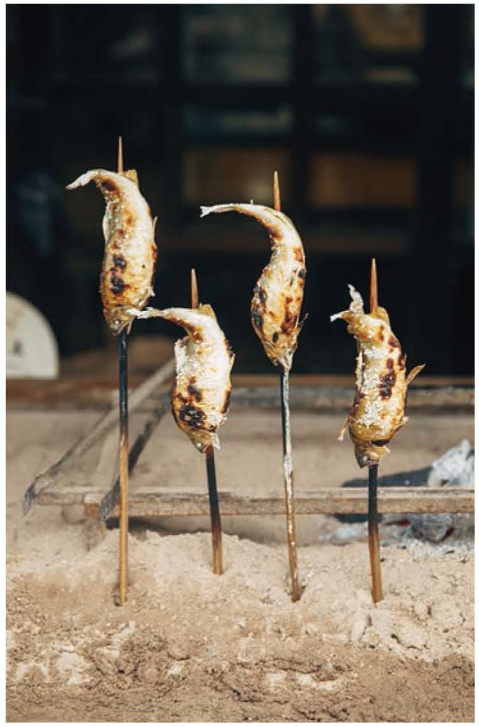


©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所





©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所





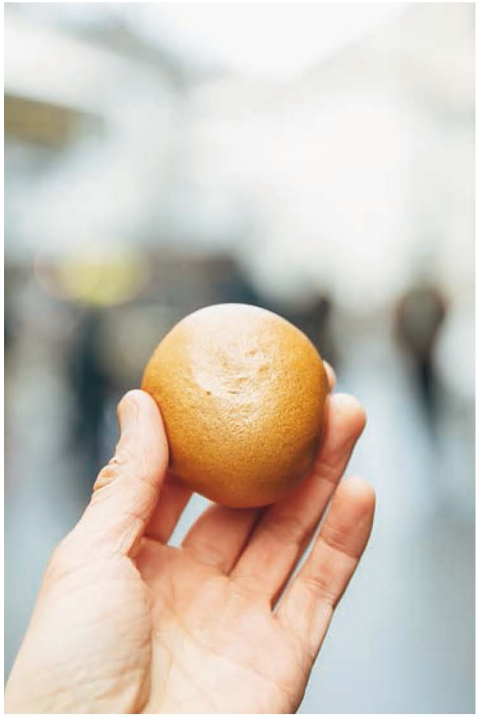












©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所



©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

編集を終えて

草津湯源湯路街と名付けた構想に一つの区切りが見えた今、湯畑周辺の表情は以前とは比べものにならないほどに豊かになりました。

御座之湯や熱乃湯と連なるように宿や商店が趣を取り戻し、車の往来が減った湯畑周辺は、ゆっくりと景色を眺める人達、記念撮影を楽しむ人達、ベンチに腰を下ろしてお茶やお饅頭を堪能する人達の姿で溢れています。温泉街全体を見渡しても浴衣でそぞろ歩きを愉しむ多くの観光客の姿を、昼も夜も見られるようになりました。

七年間にわたる多くの人々の熱意の先に、草津温泉は再興しつつあります。

一連のまちづくりの評価として、平成二七年には内閣官房「すべての女性が輝く社会づくり推進室」が主催する日本トイレ大賞の受賞、今年の五月には「良好な景観形成等への意識・関心の高揚等につながっている優れたまちづくり」とのことで国土交通大臣から受ける平成二九年度都市景観大賞(空間部門)を受賞しました。

観光客数の回復、宿や商店の賑わい、町の財務状況の改善、賞の受賞、それらに伴う様々なメディアへの露出によって、草津町の取り組みに各方面から多くの注目と期待が寄せられるようになりました。

旅行会社やネットエージェントなど、旅行のプロによる投票で決まる人気温泉地ランキング「にっぽんの温泉百選」では、十四年連続一位という快挙も達成しています。平成二八年の総評では、現在の草津を以下のように言及しています。

「歴史・文化を維持するだけでなく、「御座之湯」「湯路広場」「熱乃湯」と次々に施設や広場などを整備し、新たな魅力づくりにも努めていることから、長きにわたってにっぽんの温泉百選のトップに君臨している」

そして今、湯畑周辺に情緒と風情が生み出されたことに習い、住民の方々も加わった「街なみ環境整備事業」も本格的に動き出しています。

これからも草津が育んできた歴史と文化、そして自然の恵みに感謝しながら、より草津温泉らしい草津温泉を目指して、まちづくりは続きます。

「百年先に通じるまちづくり」となるように。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所

草津温泉再興の記録
2010－2017

発行　２０１７年５月１日

発行者　草津町
企画・編集　北山創造研究所　村田洋一・久保奈緒子
デザイン・撮影　前田景　装画　大園早香
写真提供　ナカサアンドパートナーズ

印刷　株式会社プロセス

本書の編集・制作にあたり、
ご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

本書は非売品です。

©２０１８草津町役場，Created by（株）北山創造研究所